鈴木宜山

すずき・ぎざん

儒家

経　歴

生:安永元年(1772年)、福山生まれ

没:天保5年(1834年)9月26日、脚疾により福山で没、享年63歳、洞林寺に葬る

天明8年(1788年)	17歳	阿部正倫に召されて医儒「弘道館世話取並御屋形講釈」を務める
寛政2年(1790年)	19歳	家督を襲ぎ弘道館に勤める、「御医師本科」
寛政7年(1795年)	24歳	「眼科兼」
寛政10年(1798年)	27歳	儒医
享和2年(1802年)11月15日	31歳	儒者本役(上下格御儒者)
文化6年(1809年)	38歳	奥詰
文化6年(1809年)	38歳	勇鷹神社創建に当り、御用掛を命ぜられる
文化6年(1809年)	38歳	菅茶山とともに『福山志料』を編纂
文化10年(1813年)	42歳	御使番格
文政2年(1819年)5月	48歳	阿部正精に召されて江戸へ祇役して丸山学問所に勤めながら奥講釈を務める
文政3年(1820年)7月	49歳	帰福、大目付被仰付、奥詰並家中学問世話是迄通
文政7年(1824年)	53歳	御儒者
文政10年(1827年)	56歳	奥詰
天保2年(1831年)正月	60歳	再度江戸へ召され丸山学問所に勤める
天保3年(1832年)	61歳	帰福

生い立ちと学業、業績

安永元年(1772年)福山生まれ。名は圭雲・圭輔・徳輔、諱は圭、字は君璧、宜山はその号である。藩医たる父鈴木冠巖(鈴木順節)の長子。

はじめ阿部正倫により医儒を勤める。
寛政2年(1790年)家督を襲いで百石を支給され、弘道館に勤めた。
享和2年(1802年)儒者に上り、享和6年(1806年)奥詰。
菅茶山とともに『福山志料』を編纂し、その労により章服を賜る。

享和9年(1809年)勇鷹神社創建に当り、御用掛を命ぜられる。

文政2年(1819年)5月には阿部正精に召されて江戸へ祇役して丸山学問所に勤めながら奥講釈を務める。
文政3年(1820年)7月帰福。
天保2年(1831年)正月、再度江戸へ召され丸山学問所に勤める。
天保3年(1832年)帰福。

宜山は頼山陽と深い交わりがあった。
宜山の人となりは躯幹肥大、豪飲して紊れず。
寡言だが人のためには情理をつくした。
経義に通じ、三礼に精しかった。

天保5年(1834年)、脚疾により没する。享年63歳。洞林寺に葬る。
本人は墓誌を頼山陽に託していたが、山陽が先に亡くなったので、宜山の子・鈴木秉之助は、自分の師である篠崎小竹に嘱した。

出典1:『福山藩の文人誌』、54頁、濱本鶴賓著、葦陽文化研究会編刊、1988年7月27日
出典2:『福山藩の教育と沿革史』、154頁、清水久人著、鷹の羽会本部阿部正弘公顕彰会編刊、1999年8月20日
出典3:『郷賢録』、5頁、福田禄太郎著、福山城博物館友の会編刊、平成12年10月1日
出典4:『近世後期の福山藩の学問と文芸』、84頁、福山市立福山城博物館編刊、1996年4月6日
出典5:『福山の今昔』、156頁、濱本鶴賓著、立石岩三郎刊、大正6年4月26日
出典6:『門田朴齋「朴齋先生詩鈔」詳解初編』、57頁、門田朴齋著、吉備人出版刊、2011年7月12日

関連情報1:『福山学生会雑誌(第49号)』、附27頁、「宜山鈴木先生墓碣銘」、濱野知三郎編、福山学生会事務所編刊、大正5年11月5日

2008年7月22日追加●2008年8月19日更新:氏名(ふりがな)●2009年4月1日更新:本文●2009年12月21日更新:氏名(ふりがな)●2010年3月19日更新:本文・出典●2011年7月28日更新:経歴・出典●